私はこれに燃えてますっ!!

今、何に情熱をかけてますか？って聞かれてもすぐさま答えられる人ってきっと少ないよね。「何かしたい」と思って体がウズウズしても何をすればいいのかわからない状態なんじゃないのかな。とりあえず、きっかけが必要。ここに挙げていた３人は、何かに熱くなってる人、又は熱くなっていた人です。これがとにかくきっかけをつかもうと動きだす“きっかけ”になればいいのだけれど。

「総科サッカー」

3年　**常友　計宏**

さて、何からみんなに話していいのか分からないが、うちのサッカーチームは、創立以来２年半になる。最初は、01生３人が小さな公園でボールを蹴るところから始まった。そして今でも活動は続いているのは当然のこと。試合をしないことには、面白くないので、リーグ戦（オールイングランド、トリコロール、蹴球クラブ、ｆｉｖｅ、ユベントス、ポルシェ、総科が参加チームである。）に加入している。うちは総科だ。今では20人くらいの部員がいる。経験者は、６or７人しかいないので、最初は弱かった。７連敗ぐらいした。それからなんとか２勝した。そんな超弱小チームだ。みんな下手な奴ばかりなのでサッカーをしたことのない人でもどんどん入ってこい。それから、総科という名前もやめて別の名前にする。そして、他学部からも参加者を募ろうと思う。またマネージャーも２人いる。とてもかわいい下瀬さんと真面目な牛島さんだ。マネージャーも募集している。サッカーしたい女の子も一緒に練習できたらいいとも思っている。うちの練習は、全然しんどくない。しかも水・土の週２回の練習なので大したことはない。水（15時～17時、吉島東公園）と、土（10時～12時、吉島東公園）は、変更するかもしれないが。この公園はゴール２つあり、ちゃんと練習できます。また、後に貼り紙でもして、１年生を勧誘しようと思っている。どんなやつでもいいので、一緒にサッカーを楽しみたいと思っている。１つの青春として共に汗を流してみよう。結構自由な集団です。最初は、見学だけでも結構なので、一度は見に来てください。それで、特に01生は、20人中13or14人を占めているので、試合にはすぐに、出れると思います。01生は４年生で研究or就職活動と忙しいので、試合に出れないからです。もしよかったら、キャプテン常友（082）245－0531まで電話して下さい。

私はこれに燃えてますっ!!

「広島カープの皆さんありがとう」

－日本シリーズに寄せて－

3年　佐藤　加代

1991年、広島で一番人々を熱狂させたeventといえば、やはり、「広島vs西武」の日本シリーズではないでしょうか？「目指せカープ日本一！」「西武が広島にやって来る！清原が見れる！秋山が見れる！」・・・・・・とその人々の熱意や喜びは様々でしたが、そうです。西武ライオンズが広島にやって来たのです。しかし、下馬評は、圧倒的に「西武有利」の声が多く、西武4連勝で日本一、といった解説者もたんさんいたかな。私も実際のところ、ライオンズとカープじゃ戦力が違いすぎるし、やばいかな・・・と感じつつ、でも「やっぱカープ日本一よねー。」と言ってたっけ。皆それぞれの思いを胸に、迎えた日本シリーズにおける人々のフィーバーぶりについてリポートしてみたいと思います。

まずは、チケット発売前日・・もちろん徹夜組続出・・で、早い人は、発売の前々々日から並ぶという熱の入れよう。さすがに、発売前日（というか発売日未明）は、市民球場の回りを一周するだけで、あちこちに知り合いがいる、という状況でした。毛布や寝袋はもちろん、こたつやコンロを持ち込んでなべやってる人もいたりして・・。

そして、いよいよ日本シリーズ第3戦・・・・と行きたいところだが、第3戦の前日から既にゲートの前に並んで場所取りの準備をしていた人もかなりいたのでした。みんな頑張るね。所沢球場での2戦を1勝1敗と5分の星で帰ってきたカープ。市民球場で3連勝すれば、広島での胴上げも夢ではないぞ・・・・と、ほのかな期待を抱きつつ、開門時間になると、皆いっせいに、競馬のゲートオフの瞬間のようにかけ出して行くカープファン。すごい。広大に入って、間もない頃は、やれ巨人ファンだとか、私はレフトスタンドで観戦するよ、とか　行ってた人たちも、カープ坊や付きのメガホンとバットを手に、ライトスタンドにしっかりと陣取っていたのでした。くわしい試合経過は、モノの本に出ているので、ここでは割愛させていただくが、試合が始まるやいなや、すっかりカープの応援団のペース。カープの攻撃がはじまると、♪「土にまみれて～戦え勇ましく～」♪「赤い闘志燃やせ～赤い旋風巻き起こせ～」♪「一発大きなホームラン～」♪「打て～よ達川大空へ～」と全ての選手のコンバットマーチ唄えたりして。（上に挙げたものだけでもすぐに口ずさめるあなたは立派！）そして、カープの選手にヒットが出れば、メガホンの音が鳴り、紙吹雪が舞い、カープに得点が入れば皆立ち上がり万歳三唱！そして、かの有名な真っ赤なウェーブが球場中を駆け回った。こうして、広島カープは、第3戦惜しくも西武に屈したものの、第4戦、5戦で連勝し、なんと日本一に王手をかけてしまったのである。きっと西武の選手も、カープと、あの真っ赤なウェーブの力には勝てなかったんだね。

本当に、赤いウェーブが何回球場を回ったんだろうね。結局、残念ながらカープの日本一は夢で終わってしまったけれども、広島で行なわれた3つの試合全部すごくいい試合だったと思う。あれほどの大方の予想を裏切って、私たちに優勝の夢まで見させてくれて、広島カープの皆さん、本当にどうもありがとう。

私はこれに燃えてますっ!!

「Welcome to the Triathron World」

3年　竹中賢太郎

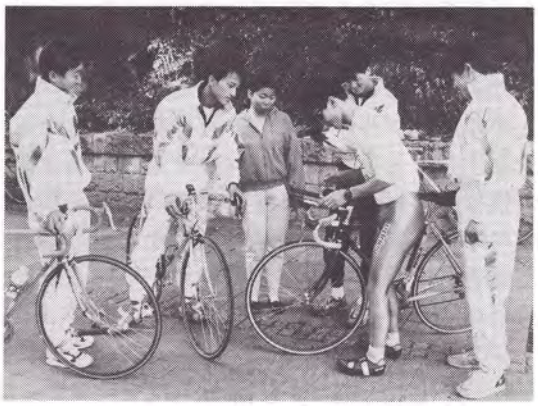
ということで、僕は昨年9月、第一回全日本大学トライアスロン選手権に出場してきました。泳ぐ、こぐ、走る。あのトライアスロンです。

そもそも僕が何故トライアスロンなどを始めたのだろうか？21才と数ヵ月、それまで100m以上泳いだ事はない。10kmなんて走った事がない、「こんな僕にできるわけがない」なんて思わなかった僕が今日の僕を支えているような気がします。実際、泳いでみると辛い、走ってみるときつい。5月から一緒にトレーニングを始めた小柳（生生・2年）が隣ですいすい泳いでいるのを眺めている自分に無性に腹が立つ。ついに500mも泳げないまま夏休みに入ってしまった。いつものぼくならここでやめていただろう。しかし何故だろう。あの時の僕は違っていました。泳いだ、泳いだ。夏休み47日中、45日、一日平均2.5km位かな？苦しくて涙でゴーグルが内側から濡れていたこともあった。そして9月23日はやってきたのだった。AM7：00、朝の静寂を打ち消すスタートのピストルは鳴らなかった。（火薬を入れるのを忘れていたそうだ）とにもかくにも僕のトライアスロンは始まった、っと思った途端に後頭部に衝撃が走った。それから約10分間、蹴られ、沈められ、引きずられ、網にかかったイワシの大群のごとくレースは進行しました。それでも何とかSWIMをクリア、よし次はバイクだ。しかし神様は冷たかった。順調そのものだった25km地点、ギヤをトップに入れたその時、「ガシャ！！」無情にもチェーンは外れ、時速40kmで僕はバイクもろともコース上を見事に転げ回ったのだった。バイク修理に約5分、ケガした足を引きずりながらなんとかレースに復活。集中力が半ば切れかかった状態でRUNに突入。しかし僕の心は踊っていた。沿道の声援も、抜けるような青空も、まだ走っている選手でさえもみんな僕を応援してくれてる様な気がして、走りながら楽しくってしょうがない。そしてゴール。僕はずっとトライアスロンのゴールっていうのは感動で涙をうるうる流しながらするものだって思ってた。でもそれは少し違っていた。それを言葉にするのは難しいのだけど、表現できないぐらいの壮快感と満足感が前身を包んでいた。

大学選手権が終わり、大学に帰った僕はオフシーズンは広島大学トライアスロンチームの設立のために奔走しました。その成果もあってか現在部員、11名（男9人、女1人、マネージャー1人）で1992年度のシーズンに向けてトレーニング中です。当然のことながら大多数が初心者で、陸上、水泳の経験者はほとんどいません。僕の勝手な意見ですが、経験者でない方が完走したときの充実感は大きいんじゃないのかなあ。水泳部にSWIMで負けても、陸上部にRUNで負けても最後に勝つのは僕だ！なんて大きな気持ちでいたいから。

僕も今年は4年生。卒論、就職の時期がやってくるわけです。しかし大学生として最後の1年、後悔しないぐらいトライアスロンに力を注ごうと思っています。

今シーズンは、3月の石垣島のレースを皮切りに、トライアスロンで全国を回り、第2回大学選手権に望むつもりです。そして1993年、3月ニュージーランドで行われる“DB IRONMAN NEW ZEALAND 1993”（SWIM 3.9km、BIKE185km、RUN42.195km）のフルトライアスロンに出場し、大学生活の締めくくりにしたいと思っています。卒業後はアメリカに2年くらい渡って、勉強しつつ、バッドライト・トライアスロンシリーズっていう10レース全部に出場してみたいっていう夢のような計画もあります。でも夢は大きい方がおもしろい。「思い通りに成し遂げれるような目標はいらない。そう簡単には実現できないから挑戦し続けるんだ」と誰かが言ったように、夢は大きく、決して諦めないことが大切だと思う。広島大学総合科学部にはそんな夢に挑むだけの感性と可能性を持った人がいると思います。トライアスロンじゃなくてもいいです。なんでもいいからみんなに「すげえ奴」になって欲しいと思っている僕の話は終わりです。



トライアスロンチームに何かを感じた人、ぜひ入部してください。

文化講座　広島の中小企業

社会科学コース　舟場研究室

広島県は工業県といわれています。昭和63年の県内総生産の構成を見ると製造業は34.4％を占め、全国平均の27.7％を大きく上回っています。また、平成元年の製造業出荷額は８兆2500億円と全国の2.8％のシェアを持ち、さらに前年比で10％以上の高い伸びを示しています（10％以上の伸びを示す県は11県）。つまり、製造業に秀でた広島県がますますその層を厚くしている、といえるのです。

これら製造業の集積を支えているのが中小企業で、広島にはいろいろな分野の数多くの中小企業が存在しているのです。そして、中小企業の集積が、地域の経済活動にとって重要であることは間違いないのです。

今年はバブルが崩壊し、その結果お金がお金を生む、といったことはなくなり、製造業の復権が叫ばれています。今が「旬」の製造業の中で、高い技術やユニークな方針を持った魅力的な広島の中小企業をキーワードとともにいくつかご紹介しましょう。

文化発信企業を目指して‥‥

「オタフクソース株式会社」

最近、メディアによって地方を代表する『食』が盛んに取り上げられるようになり、「食は文化なり」という言葉もすっかり定着したようです。実際、文化とその地域の食事とが切っても切り離せないものであることは、教科書で学ばなくとも経験からもおわかりになることでしょう。

ここ広島で「食の文化」の代表といえば、やはりお好み焼きでしょう。広島風お好み焼きの名は、関西風お好み焼きに対するものとして全国的に名前が知られているだけでなく、モスクワなど世界諸都市にも店が進出し、お祭などでも広島の味として紹介される、いわば世界ブランドなのです。今回訪問したオタフクソース株式会社は、お好みソースの分野でのトップ企業で、広島風お好み焼きの名とともに成長したというだけでなく、お好み焼きの名を広げる役割も担っているのです。

「オタフクソース(株)」の前身は、大正12年に創業された酒や醤油の卸小売業「佐々木商店」で、昭和13年からは醸造酢の製造も始め「お多福酢」の名前で売り出しました。原爆により壊滅的な打撃を受けたものの、昭和22年から製造を再開、その後、昭和25年には将来の洋食普及を予想して、ソースの生産に乗り出し、昭和50年には社名を「お多福酢」から現社名の「オタフクソース(株)」にかえました。現在、ソースは全売上げの７割を占め、醸造酢の生産からソースの生産に主力を移したのです。ソースは広島市西区の商工センターにある本社工場で、食酢は賀茂郡大和町にある大和工場で生産されています。本社工場は現在総工費20億円をかけて改築中で、平成６年の完成後には自動化された大規模な製造ラインがお目見えする予定です。製品の製造ラインは自動化されているのですが、数多くの異なるボトルに充填する作業に人手が必要なのです。大和工場は充填工程を有していないため、わずか６人で工場が運営されています。高度なノウハウを必要とした発酵工程も今ではコンピュータで制御され、その制御用ソフトウェアも自社を中心に開発するなど省力化を進めています。工場スタッフの平均年令は28歳、会社全体でも20歳代が多いため、若い社員の提案により、工場スタッフはペパーミントグリーン（男性)、シャーベットオレンジ（女性）の作業着に、事務スタッフはブルーのチェック地の制服に切り替え、明るい雰囲気を作り出しています。

ところで、食酢の生産にはバイオ技術が不可欠ですが、オタフクソースでは大和工場にバイオ研究室を準備中で、今後バイオテクノ

ロジーを活かした製品の開発を目指しています。もちろん現在も研究開発部を中心に新製品の開発が進められており、小麦のタンパク質を分解した「バイオソフト（商品名）」などを発売しています。この「バイオソフト」、お好み焼きなど小麦粉を使う食品を美味しく調理するためのもので、研究開発が「美味しさ」というソフトな目的を満たすもの、ということがわかります。

さて売上高ですが、平成2年度はおよそ60億円で、これは5年前のおよそ2倍の数字で、販路拡大が好調な業績を支えている形です。特に東京と大阪への進出が販路拡大にとって重要で、東京や大阪の営業規模は広島での規模よりもずっと小さいものの、売上では広島に比肩し得るものです。実は東京や大阪への進出は、広島風お好み焼きの名前と共に進んだものなのです。

広島を始め中国地方では「オタフクソース」の名前が通りますが、東京や大阪ではほとんど無名。しかし、広島風お好み焼きが知られると、自然にソースの売上も伸びたというわけです。それは昭和61年には「お好み焼きの普及」を事業とする会社を設立し、店の開店相談や設備の販売、手軽な冷凍製品・持ち帰り製品の販売など、広島風お好み焼きの普及活動に積極的に踏み出したことからもわかります。さらに、広島から中国地方、日本全国、そして世界へお好み焼きを普及させると共に販路を拡大する戦略は、山口や広島にアンテナショップを設けたり、生協がボルゴグラードへ進出する際に社員が出向いたり、ハノーバーやL・Aでの見本市にも参加しお好み焼きの実演を行うことなどに表れています。

こうしたお好み焼きの普及活動とは別に、文化としてのお好み焼きを捉えることも忘れてはいません。創立60周年を記念して出版した本は、お好み焼きの原料やお好み焼きと健康、さらには化学分析などを盛り込んだお好み焼き啓蒙書になっています。こうした会社ですから、当然新入社員に対するお好み焼きの訓練もあります。お好み焼きがわからなければソースもわからない、ということでしょう。このように、お好み焼きと自社商品とを一体として捉えた会社の姿勢は、いずれお好み焼きのことなら何でもわかるという情報提供のできる会社になりたい、という希望につながっています。

お好み焼きという広島の食文化を背景に成長してきた「オタフクソース(株)」は、販路拡大のためにお好み焼きを普及させる戦略を取りました。それは、お好み焼きを文化として捉える姿勢があるからこそ出来たのであり、そしてそれが文化発信を行う立場を確立することとなりました。今や企業の文化活動はひとつのブームになっていますが、コンサートを外国から招待するというだけでなく、それぞれの活動に合った文化を発信する企業が増えることも大事なのではないでしょうか。

オタフクソース・データ
（平成3年4月現在）

本　社：広島県広島市西区商工センター
7－4－27
代表者：佐々木繁明
資本金：100百万円
従業員：214名
売上高：5,951百万円（平成2年9月決算）
当期利益：157百万円（平成2年9月決算）

本業を活かしてハイテクへ‥‥

「株式会社ディスコ」

ＮＨＫが放送した「電子立国：日本の自叙伝」、その第6回に広島県呉市のメーカーが登場します。メーカーの名前は「ディスコ」。半導体ウェハーをダイシングする機械の世界的メーカーとして紹介されています。広島県は機械工業には優れているのですが電気・電子工業は弱いと言われています。しかし、電子工業を支える半導体の製造機械が、広島でも生産されていることは、機械工業の集積を物語るものではないでしょうか。

株式会社ディスコ（DISCO）は、その前身である「第一製砥所」の頭文字“Daiichi Seitosho Co”を取ったものです（昭和52年から）。テレビでも紹介されていましたが、「第一製砥所」はかつての呉海軍工廠で軍艦

の砲身などを磨く砥石のメーカーとして、昭和12年に誕生しました。日本では砥石の技術は遅れており、明治以来アメリカの「ノートン社」の砥石を輸入し、その後は「ノートン社」が日本で生産（現地生産）を行なっていました。しかし国防上の理由から砥石の国産化を進め、呉にあった「ノートン社」の工場は撤去され、その跡地に「呉砥石」「第一製砥所」など砥石メーカーが創業したのです。「第一製砥所」は呉の中でも後発グループで、いつかはトップ企業にという思いが『第一』という名前を付けさせました。こうしたトップへの熱き願いは、創業の３年後に東京に本社を移転し全国を舞台にしようとしたことからも伺われます。

ところで、テレビを見た人の中には砥石でなぜウェハーが切れるのか、という疑問を持ったかもしれません。砥石というと磨くためのもの、という印象があるからでしょう。実は砥石には「磨く」「研ぐ」「切る」という用途別に３つの種類があるのです。この３種類の砥石は原料は全て同じで、ダイヤモンドとカーボランダムから成る砥粒とそれらを結合させる結合材です。しかし、「磨く」目的の砥石は粒の密度が高く、「切る」目的の砥石は厚さを薄くしたものです。ですから「切る」と言うよりも「研削切断」という方が正しいでしょう。

戦後「(株)ディスコ」は「磨く」から「切る」砥石に生産を特化させ、それが成功のきっかけを掴んだのです。昭和31年には万年筆会社の依頼により日本で初めて極薄（130～140ミクロン）の砥石を大量生産し、ペン先の切割の他にも磁性抵抗体など電子部品の加工に使われるようになります。そして昭和40年代からトランジスター加工用にさらに薄い（100ミクロン）砥石を完成、エレクトロニクスと砥石との結合点が生まれました。そして昭和44年に40～70ミクロンの薄さの砥石が作られた時、シリコンウェハーからチップの切り出しにも使えるようになったのです。しかし機械がなく、当初は中小メーカーに製作を依頼したものの砥石の特性を活かしきれず、結局自社開発を決定しました。その開発には、これまでの「切る」技術が大いに活用されましたが、開発には７年を要し、昭和50年ようやく本格的な半導体用のダイシング・ソー（シリコンウェハーを切る機械）の量産が開始されたのです。「(株)ディスコ」はこれまでの技術を最大限に活かし、本業を外さずにハイテク機械生産メーカーへと進んだのです。

現在では、石材や鋳鉄管からシリコンウェハーまで切断できる大小さまざまな砥石の生産が36%、ダイシング・ソーなど半導体生産装置が35%となっています。

砥石の生産工程では従業員が、フェノール樹脂とカーボンとを計って型にいれ200トンプレスで圧縮するなど全て手作業です。従業員の平均勤続年数は20年で、砥石の生産が人手に頼る労働集約的なものであることがわかります。

ダイシング・ソーの生産はフレームを据えつけ、1000点にも及ぶ部品を取り付けて機械を完成させていく、まさに１台ずつ手作りの方法が取られています。１台につきメカニカル部分と電子部分を担当する２人の従業員がついて、その機械だけ組み立てていくのです。１台１台の機械に作業者２人の名前が張り付けられ、出荷後のクレームや補修には彼らが対応するのです。完成までにはおよそ２ヵ月かかり、作業者は２ヵ月間、１から10まで機械の面倒を見なければならないのです。これも注文生産ということから出来ることなのですが、ハイテク製品が実は手作りで生産されているのです。現在では月に50台程度の生産です。

部品の多くは、東京大田区の企業が購入しています。大田区には「(株)ディスコ」の本社とＲ＆Ｄセンターがあり、ダイシング・ソーの第１号もここで生まれたのです。今ではダイシング・ソーの90%が呉で生産されていて、本社では200人の開発要員により開発・試作と従業員の訓練が行われています。しかし、地価の高騰などにより、いずれは広島にＲ＆Ｄの機能を集約する可能性もあります。

テレビではダイシング・ソーのメーカーとして扱われましたが、今や磁気ヘッドの加工など精密加工の分野、ハイテク結晶材料の開発、さらにはシリコンウェハーの酸化・拡散装置（シリコンウェハーの酸化膜に回路パター

ン通りの不純物を形成させるための機械）の生産と、「切る」技術、砥石の技術、半導体生産の技術を活かした技術の展開を行っています。こうした多角化には、昭和60年からの半導体不況により、売上高が大きく落ちたことも影響しているのでしょう。

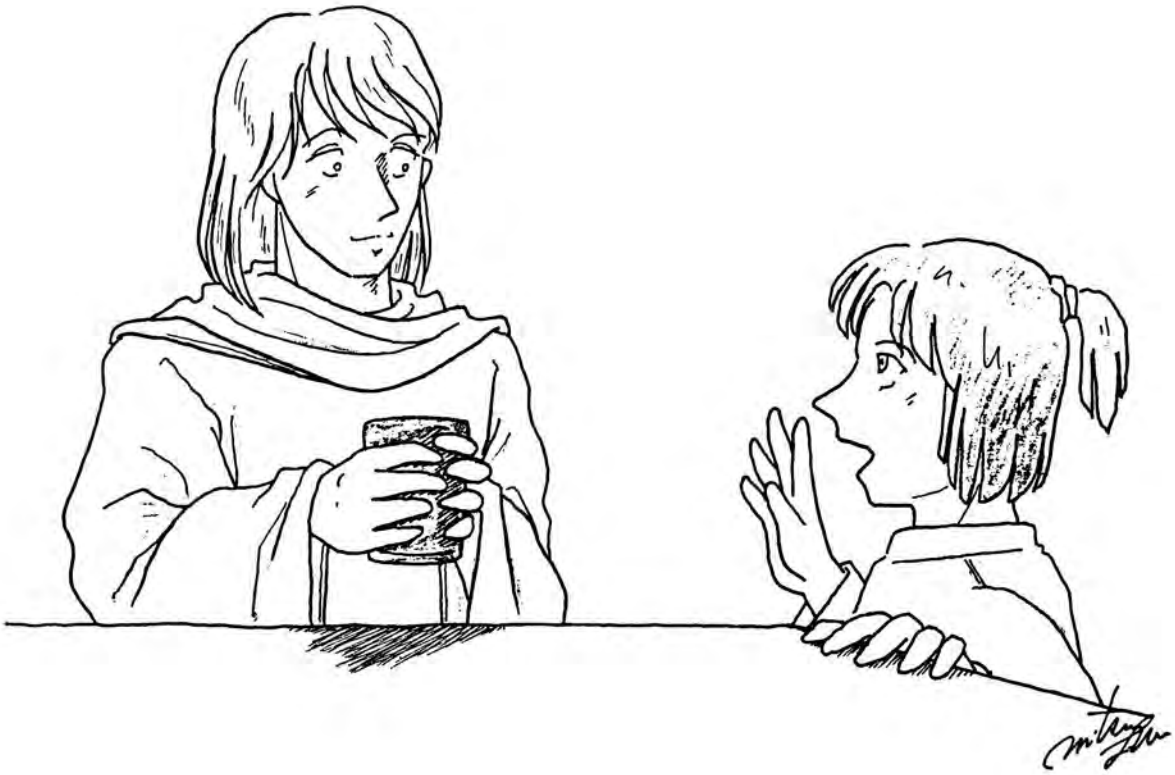
「(株)ディスコ」は持っている技術とノウハウを活かしてハイテクに転換することが出来ました。しかしハイテクとは手作りの要素も大きく、自動化されたラインで生産されるＩＣやＬＳＩのハイテクとは異なる面を持っています。手作りの要素が大きいからこそ、砥石の特性を体で知っている「(株)ディスコ」が、それを活かすハイテク機械を作ることができたのではないでしょうか。

ディスコ株式会社・データ

（平成３年３月現在）

本　　社：東京都大田区東糀谷２－14－３
代 表 者：関谷　憲一
資 本 金：3761百万円
従業員数：633人
売 上 高：16177百万円
（平成３年３月決算）
当期利益：843百万円
（平成３年３月決算）

（文責・協力　田端　和彦）



旅　－人は何故旅するのか？－

旅－－－自宅の土地を離れてよその土地に行く事－－－。私の持つ岩波国語辞典にはこのように記載されている。うーん、確かにその通り。家、つまり日常生活を離れて見知らぬ世界へ移動する。きっかけは様々だろう。現実逃避、日常の煩しさからの脱出、未知の世界への憧れ、気分転換等々、……。それぞれが、それぞれの“何か”を求めて旅をするのだろう。

かくいう私も旅は大好きである。私が求めているものは……やはり未知との遭遇でしょうか。旅先で出会った見知らぬ人々や、見知らぬ場所はもちろんの事、同行者や、自分に対してだってそうである。その土地に住む様々な人の暖かさや優しさに触れ、美しい景色、壮大な景色に感動し、今までやった事もないような新しい経験をする事により、もう知りつくしてしまったような友人や、ましてや今まで気付かなかった自分の新たな一面を発見したりするものである。それは日常から解き放たれたという解放感から現れてくるのかもしれない。特に１人旅であれば尚更だろう。周りには自分を知るものは誰もいない。自分を縛るものは何もないのである。しかし素晴らしい景色の前に立った時に、その感動を１人でかみしめるより、分かちあえる人がいるというのも大切だと思う。１人旅がいいか、人と連れ立った旅行がいいかは好きずきですね。

旅、その必要十分条件に「移動」というものが挙げられるのは明らかですが、何も物理的移動だけじゃあなくてもいいと思いませんか。精神的移動でも旅してるっていえるんじゃないかなあ。つまり、「心の旅」ですね。例えば、映画見たりとか、本読んだり、考え事してる時だって自分が、いつもの世界からはトリップしてるって感じられる事が誰にでもあるんじゃないのかな。それだけでも十分日常生活からの離脱が図れ、心の栄養補給になると思う。しかし時間的・経済的余裕があるんなら、是非いろんな世界を体感して、自分の経験の幅を広げて欲しいと思う。何事も「百聞は一見に如かず」ですからね。

という訳で、前置きが長くなってしまいましたが、今回夏休みにとっておきの体験をしたという２人の旅行記を紹介します。これを読んで、早速旅行の計画をたててみてはどうでしょうか。（但し、時間的・経済的余裕があればですよー。）

旅ー人は何故旅するのか？ー

「ＶＩＶＡ！北海道」

3年　大森　瑞恵

去年の夏、吾妻・和田・岡村・田川・丸山・大森の六人は、バイトで小金をため二週間ばかり北海道旅行にでかけた。レンタカーと和田車を使い、敦賀から小樽まではフェリーを利用した。フェリーには一日半ぐらい乗ることになるんだが、でかいフェリーなんで波の荒い時以外はほとんど揺れは感じない。遊園地の乗物であげそうになる和田君も大丈夫だったから安心していいと思う。それに、浴室から日本海に沈む夕陽は見えるし、夜は甲板で流れ星が見られるし、なかなか快適だ。

さて、北海道はと言うと、これはもうどこに行っても何を見ても、「すごいっ」と言わなかったことがないくらいにすごいんだっ。語い力がないと言われようとも「でも本当にすごいんだーっ」と言い切れる。うん。何がそんなにって、まあ月並みだけど自然の多さと雄大さ。本当に月並みだって思わないで下さい。「北の国から」のほたるちゃんがかいならしていたキタキツネが道路を横切ってテクテク歩いてて、「るーるるるる」と呼ぶと寄って来るんだ。でも、ライダーの人が言うには、触わっても餌をやってもいけないんだそうだ。他にもエゾジカやリスやゴマフアザラシだって見たのだ。それに自然の景色が、これどこまで続くんかって思うぐらいにスケールがでかくて、北海道ってやっぱり大きいんだなあと今さらのように感心してしまった。印象深いのはまず摩周湖だ。霧が深くてめったに見られず、見えれば晩婚だと言われている摩周湖だけど、だれかの晩婚パワーのおかげで、みごとに霧も晴れたのだ。湖水の深い青と周りの山の緑に白い霧が絶妙で、ありがとうと思わず岡村さんの手をとりたくなるほどにきれいだった。あと「北の国から」で知られる富良野は、あの通りの美しい所で、絶対もう一度来ようと思わせる。盆地地形で周りを丘がぐるっと囲んでいるんだけど、この丘にとうもろこしや牧草、玉ねぎなんかの広い畑があるわけで、それが濃い緑だったり黄金色だったりして、でっかいパッチワークのようだった。うまく言えないから、「北の国から」を見て下さい。本当にのどかで、美しいという言葉がぴったりだと思う。うん。

それと北海道の人はすごく親切だった。納沙布岬の「日本最東端の店」のおじさんは日の出を見そこねた私たちにお茶を入れてくれたし、寿司屋のおばちゃんは夕張メロンを食べさせてくれたし、富良野のおじさんは鍵の閉じ込めをやってしまった和田車を救ってくれた。ちなみに和田車ばっかり二日のうちに四回も閉じ込めをやったのだ。ね、丸山。

北海道は自然一杯で広々としていて、人も優しくて…と本当にいい思い出ばっかりだけど、これも一緒に回った五人のおかげだとしみじみ思う。吾妻君は田川と私の会話にあきれつつも楽しみながら、唯一のしっかり者として頑張ってくれた。和田君は田川と共に眠りこけ心中しそうになりつつ、無事運転しきってくれた。丸山は丸山で北海道では40km/hをキープしつつ、帰りは何を思ったか130km/hの走りを見せてくれた。田川はカニ一匹で高校生を手なずけるし、岡村は景色も見ずに寝こけ、目を覚ませば変な写真はとるしと、この二人は運転できないぶん笑いをとってくれた。こんな五人に囲まれて、ひたすら笑いありの愉快な旅だったと思うわけで、本当にありがたかった。

納沙布岬

旅ー人は何故旅をするのか？ー

「91'夏シルクロード旅行」

3年　田坂　秀雄　&　平川　法義

7／18（晴）

朝、揚子江に入ったとの船内放送。見れば遠くに岸がある。これより4時間も川を上るとはさすが、悠久なる大河の流れ。
上陸手続きは簡単に済み、チケットを手に入れ空路西安へ。窓に映るダイナミックな夕陽はいつまでも続く...。
西安よりウルムチは列車を使う。この凄さは文面では表せない。詳しくは本人まで。

7／19（晴）

ウルムチに到着。列車の中の出来事を考えると、大地に立っていることが信じられない。列車の中で世話になった、通称ボスが彼女に会いに行くからついて来いと言う。一時間、バスに揺られ彼女のところへ。まゆが薄く、ロングヘアーの日本美人的な人だった。ここでデートにつき合わされる。公園を歩き、場所を見つけ持って来た敷物を広げ語り合う。この時は我々が居たため、ビールを買って来てじゃんけんをして飲んだ。「俺たちは何をしているのだろう？」と2人して思う。

7／20（晴）

今日はクチャへ二泊三日のバスの旅。荷物は狭いバスの中、席は三列シートの端。ウイグルのおばさん達はおおかた太っていて、隣の人も例に漏れず、窮屈だ。平地を走り、谷に入り、山を越える。熱風が窓より吹き付ける。砂塵もはいってくるので、タオルで口をふさぐとウイグル人が笑っていた。「なぜじゃ」。よる11時まで走り続け、宿泊所はただ寝るだけのところだ。何もない。店で食事の注文をするのが漢字、中国語、英語、すべて通じず、必死のジェスチャーゲーム、今日の食事がかかっている。なんせここはウイグル人の町。食事は出て来たのでしょうか？

7／21（快晴）

北京製のジープに運転手と田坂、平川3人で岩砂漠をひた走る。クズルガハ峰火台、千仏洞。スバシ古城。塩水渓谷ｅｔｃ。石窟の多さに驚く。しかし、時代の流れによるイスラム教の流入により、破壊されているのがほとんどだ。城壁に登り当たりを見渡す。「国破れて山河あり～」の詩が心に浮かぶ、いく千年前の繁栄が、影となり現在に横たわる。否応無く、悠久を感じさせるこの時。

7／29（晴一時雨）

バスは灼熱のトルファンへ走る。道は果てしなく直線、太陽は大地を燃え上がらせてゆく。地平線はどこまでも...。持って来たシルクロード音楽（喜太郎）をかける、感動が体を突き抜けて行く。高校からの夢が現実になった瞬間。

8／1（晴）

今日の乗り物はホロ付きのロバ車。これに知り合った日本人と5人で近くの名所を回る。カレーズ（井戸）、蘇公塔、交河古城ｅｔｃ。ロバ車は、揺れるし遅いが、この速さが何とも言えぬ風流さをもつ。御者は14歳、たばこも吸うあどけない顔の少年だ。夜、ツアーのメンバーで3元（＝90円）のスイカを食べる。うまい。

8／7（晴）

昨日はテレビで広島のニュースをやっていた。そろそろ日本が恋しい。だが今日は、敦煌の莫高窟へ行ける、仏教芸術の最高のものがそこにある、恋しさも吹き飛ぶというもんだ。建元二年（366年）の北涼の時代に始まり、元の時代まで千年にも及ぶ歴史の中で、仏教を求めた人々のねがいがそこに詰まっている。

夕食は鍋物を２人前、その後にビールを片手にシシカバブー（羊の焼き鳥)、陽気な２人がウイグル人と話をする。

８／９（曇）
ドイツ人が通訳を求めて来た。連れ合いが病気をして医者に見てもらっているが、言っていることが解らぬという。漢字は解るが英語の単語が解らぬ二人だった。得意のジェスチャーここでも爆発した。お腹の、菌が、腸を、アタック、アタック。

８／10（曇りのち晴）
日の出は７：30ごろ、日没は９：30ごろ。朝から、鳴沙山からの砂で、町全体がかすんでいる。夕方には、晴れ間も広がり、三輪タクシーで鳴沙山へ行く。砂でできているその山に登り、太陽が地平線から消えるまで黙ってみていた。す、すると足元にサソリがいる。ファンキーな役者が照れ笑いしていた。

８／11（曇）
列車で西安へ向かう。前回の普通座席に懲りて、寝台車の方に乗る。そこでは、マナーは多少なりともあり、疲れることはほとんどない。歯医者の卵の人と友達になり、中国と日本のいろんな違いを話す。例えば、正月の祝い方や食べ物、日本のテレビなどｅｔｃ。

８／16（晴）
昼過ぎ、上海に列車が着く。ホテルは親切なシンガポール人と一緒に相部屋となる。夕食を一緒にして、ジャズバーで飲む。周りは西洋人ばかり。カクテル片手に聞いた“Ｏｖｅｒ　Ｔｈｅ　Ｒａｉｎｂｏｗ”が旅の終わりだった。

旅行中、
～時の過ぎゆくままに～の二人であった。
Ｈ．３．７月16日～８月19日

大河源流

敦煌郊外

クズルガハ峰台

社会科学コース

松岡研究室

第1節　人物紹介

1992年1月13日現在、松岡研究室には変な人間ばかりいる。一見アナーキーだが単なるわがまま男、強情だが酒に強いやつ、見た目より根性のある方、にぼしの好きな自然児、ちょっと飛んでる人、心配性の一人上手、これでは先生もさぞ大変だろう。実際おせじにもまとまりがあるとはいえない。うわべのまとまりはいらない。みんなやりたいことをやりつつやらねばならないときにはしっかりやればいいのだ。今年はそうしていこう。

第2節　中身の紹介

松岡研は経済をやっている。どんな経済かというと「経済の限界にいどむ経済」である。いまの世の中、マルクスもケインズもマネタリストも解けない問題だらけである。解けないものを集積の不利益、モラルハザードといった言葉でまとめることはたやすい。しかし、松岡研はそこでまとめない、すぐに答えを求めないのである。経済学で解けないというがいったいどこまで解けるのか、解けないのか。解けない部分には何が必要か～工学・生態学・数学～必要であれば何でもやります。なにをかくそう学生が中途はんぱにまとめたときの松岡俊二の第一声は「どうしてもっとやらないの？」である。ちなみに、昨年やった、また今やっているテーマは以下のようなものです。

㋑環境価値論・・・環境の価値とは何か、どこまで評価可能か。大阪湾のレクレーション価値を計測。

㋺都市物質循環と環境系社会資本システム・・・「ゴミ問題・水問題を解くカギは自然と都市のインターフェイスとなる社会資本をいかに整備するかにある」との仮説から出発。

㋩都市再開発論・・・お金の動きだけでは語れない都市再開発の社会的費用便益分析。都市の魅力とは？はたまた都市とはなんぞや？

他にもいろいろあるけど今日はこれくらいにしときます。

生体行動科学コース

黒川研究室

あなたは、どんな人とどんな関わりを持っていますか？まさか「誰とも関わりを持たない」って人はいないでしょう。多かれ少なかれ、自主的なものであれ運命的なものであれ、私たちは社会生活の中で「人間」との関わりを持ち続けています。そんな人間関係、二者間の関係から集団間の関係まで、研究していっちゃう黒川正流先生の研究室。現在の研究テーマは、といいますと‥‥①親密な二人の相互依存性についての研究。②自己－他者比較様式の日米比較。③集団行動・リーダーシップにみられる性差に関する実験的・実証的研究。‥‥というぐあいです。集団力学やリーダーシップ論などの講義を受け持っておられる黒川先生、どうも「集団」研究というイメージがあるようですが、こーんな幅広い人間関係もテーマにしておられるんですねー。また、③のテーマ、性差については、去年の七月にめでたく助手になられた、若く美しい坂田桐子先生がおもに研究なさっている領域です。先に挙げた研究テーマについてもうちょっと説明すると、「恋人・親子・親友などの間の関係性について様々な状況における相互依存関係と勢力の構造を調査研究する」「対人関係や集団状況における行動と影響方略の性差をステレオタイプ、社会的カテゴリー化等の観点から明らかにする」って感じになります。ほ～ら、おもしろそうでしょう～。

総科２Ｆの研究室と共にあの“貨車”（桐子先生の部屋）を使っていて、「ズームイン！朝」や「筑紫哲也ニュース23」にも出ちゃったこの研究室。九州男児の心意気？で、厳しいけれども面倒見が良く“気のいいおやじ（某先輩談）”である黒川先生のもとには、桐子先生はじめ、温厚な紳士で幸せいっぱいの博士課程後期の院生、金城さん、そして学部の学生数名が集まっています。この人たちの人間関係を調べるのもおもしろそう？しかし春からは、金城さんと４年生のMori川さん、Funa木さんがおられなくなるため、黒川研も寂しくなりそうです。これを読んでいるあなた、そうア・ナ・タ！黒川研という集団に入りたくなったでしょう～。毒気があって打たれ強いあなたなら大丈夫？まずは、黒川先生の講義を受けてみて下さいな。

秋季学部長杯ソフトボール大会の報告

空の青さに反して冷たい風がひゅっと吹く中、11月17日日曜日、秋期総科ソフトボール大会は行われたのであります。前回に引き続き、「一年生は一回戦負け」のジンクスはどこへやら、03生チームがあーらららという間に勝ち進む中、我輩今回はちょっと脱線した取材をしたのであります。

まずはユニフォームシリーズ。もともと当大会ではチームごとのおそろいものなんて、ちょっとお目にかかれない。ところが今回まず目を引いたのが、63文系の赤いトレーナー。何故赤なのか。では広島で赤といえば？そう、今年リーグ優勝した広島カープ。その赤と情熱の赤とをかけているのだそうだ。だから応援も球場ののりそのまま。カープの応援歌は出るわ、風船は飛ぶわとまあ、まるでお祭りさわぎ。でも何といっても63生にとっては今回が最後の大会。すてきな思い出になったことでしょう。

さてさて次の目を引いたのは、文系教官チームと、環境02チームの青い帽子。まずは文系教官チームから。

正面にＳ字マークの青い帽子。よくみるとみなさんがかぶってらっしゃる訳ではない。聞くと、「外国語の教官でそろえてるんですよ」。成程、納得。「ちなみにＳは総科のＳ」だそうだ。

さて最後に環境02チームの青い帽子。正面には『ＳＯＵＫＡ　ＳＩＺＥＮＫＡＮ』の字。そして横には一人一人のニックネームが縫いとってある。何でも知る人ぞ知る。夏休みの大山巡検のときに、ソフトボール大会に向けて作ったとか。ということは青はやっぱり自然に青なんでしょうかね。

といったところでユニフォームシリーズはひとまずおしまい。ここで本戦第一回戦を、03チームと女の子チームに焦点を当てて見てみよう。

03チームはジンクスなんて何処吹く風で、７チーム中３チームが共に02チームを下して圧勝。そして負けた３チームのうち１チームは、その名のごとき女の子ばかりのチーム、「ハーレムライターズ」のハンデに追いつけず敗退。また１チームがメンバーが二人しか集まらず、相手を不戦勝で押し上げるという豪快技に出た。先輩方からみれば、どうした02、何者や03っというところでしょうか。

女の子チームは今回は、「おいらんず」（63文系）・「ボンビーギャルズ」（01）・「ハーレムライターズ」（外国語02）の３チームが参戦した。うち、「ボンビーギャルズ」と「ハーレムライターズ」とが一回戦をほぼハンデで勝ち残る。以後「ボンビーギャルズ」は12点のハンデと守備の固さとで勝ち進み、決勝にコマを進めた。

一方、奮闘を続ける03チームの中で、準決勝に届いたチューター２の「エハラーズ」は、優勝候補の63文系「昇鯉会」に当たり惜しくも敗退。本戦決勝は「ボンビーギャルズ」対「昇鯉会」と相なった。

ピンポンパンポーン。突然でありますが、ここでおいしいニュースを一つ。先輩方の中で、昼食をローソンやポプラで簡単に済ませてしまった方、いらっしゃいませんか。ところがどっこい、あるところにはあるんですよ。（ふっふっふっ。）あちこちでチームごとに手作りのお弁当が広げられる中、どこからともなく困ったちゃんコールが……。そう、03の女の子達、量加減がいまいちわからずに、殆どのチームでお弁当が残ってしまったのだ。それもハンパな量じゃない。グローブがすっぽりと入ってしまうでかいタッパー数個に、おにぎり、サラダに卵焼きがあるわあるわ。曰く、「これでも春よりはうんと少ないんですよ」。お弁当のあてのない方、一年生の女の子に知り合いを作っておくのも手かもしれませんよ。

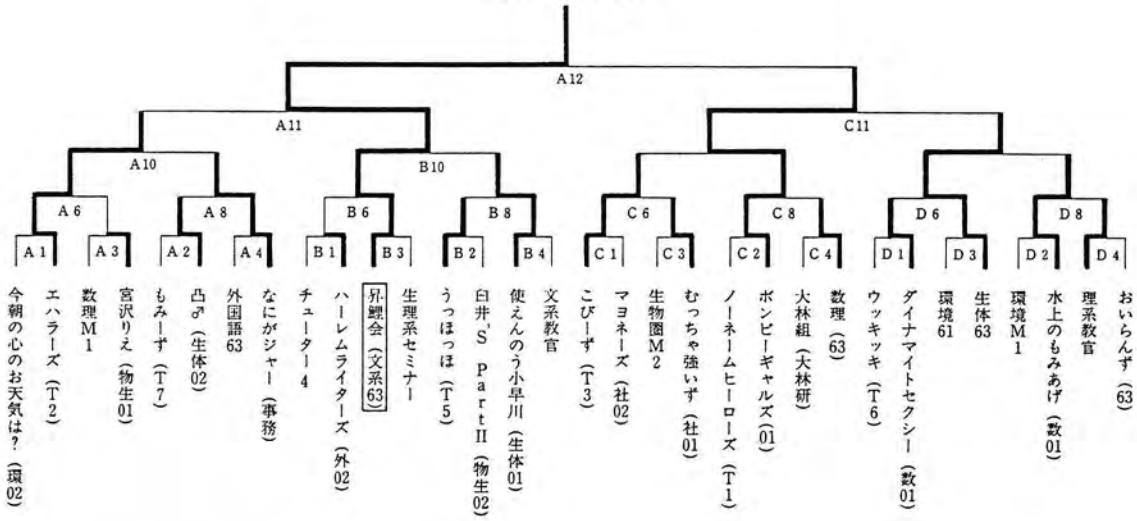
何やかやと脱線しまくった取材ではありますが、とにもかくにも大会はクライマックスになるのであります。本戦決勝の「ボンビー

ギャルズ」対「昇鯉会」は、野球経験者が多い「昇鯉会」が見る間に「ボンビー」のハンデを追い越し、見事に風船を飛ばして優勝に花を添えたのでありました。一方本線の三位決定戦、敗者復活の決勝戦の最終回では、逆転の夢が見えたかと思う、ホームランやヒットが出ておりましたが、結果は以下のように終わったのであります。

寝不足で参加した人、怪我を押して出場した人、半日しか参加できなかった人、お弁当作りに精を出した人、いろいろいましたが、ともあれ、みなさんお疲れ様でありました。

（文責　蟹由　昌美）

☆優勝☆



飛翔箱 2

誓言から逃げる魔道師

山本みつね

僕たちが選んだ“瑠璃の泉”亭に、その魔道師はいた。

「ディル、あたしは本っ当にお腹がぺこぺこ。早く何処でもいいから座りましょ」

ごった返した店の喧騒に負けない声で、白い神官服のフィリアが訴えた。空腹というのが嘘に思えるくらい元気のいい声だ。僕は苦笑し、店内を見回した。町は、この国の王に世継ぎが生まれたとのことで祝祭の最中(さなか)にあり、大通りから外れているこんな店でも大いに賑わっているようだ。殆どの卓(テーブル)は埋まっていた。しかし、ずっと奥の方にはちらほら空席のある卓(テーブル)が見える。その中で四人が一緒に座れそうな所は、一番奥まった一卓だけのようだった。僕はそちらへ歩いた。仲間たちも付いてきた。

「失礼して宜しいですか？」

僕は胸に手を当て、先客に一礼した。その卓(テーブル)にひとりで腰かけていた先客は、僕の声に顔を上げた。

その一瞬、僕はこの卓(テーブル)を選んだことを後悔した。

男は、黒いローブとマントを身にまとっていたのだ。フードはかぶっていないが、そのローブは紛れもなく魔道士たちが着る物であった。そして、黒いローブをまとう者と言えば、邪悪な闇や魔の力を使う黒魔道士に違いないのだ。何故迂闊にもそれに気付かなかったのだろう。この卓(テーブル)は空いていたのではなく、避けられていたのだ

相手は、僕の顔色の変化に気付いたのだろう。笑みを浮かべた。驚いたことに、それはほんの少し寂しそうな微笑だった。

「どうぞ、吟遊詩人さん。後ろの方々も、嫌でなければ」

意外に穏やかな声が返ってきて、僕は戸惑った。それは仲間たちも同様だったらしく、僕の隣にいた巨漢の戦士ラダがこっそり後ろに目配せをした。

「別に、取って食ったりはしない——いや、ひょっとしたら食われるのは私かな」

黒ローブの青年は肩をすくめて苦笑いした。それだけで僕は、後ろにいる筈のフィリアの顔を思い浮かべることが出来た。彼女は光の神の神官なのだ。邪悪な黒魔道士など、その存在すら許していない筈だ。

「何故お前のような——」

果たしてずいっとばかりに彼女が踏み出してくる。まずい、と僕が青くなった時、

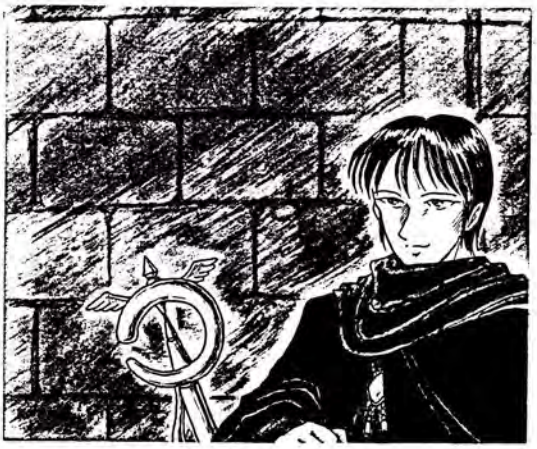
「待ってくださいフィリア！　その方は魔道師です！　魔道師ギルドから魔術を教える資格を貰った、れっきとした魔道の先生なんです！」

魔道士であるケルクが、声をあげてフィリアの袖を引いた。

「魔道師？」

フィリアの疑わしげな目を、黒ローブの青年は穏やかに受け止めた。僕はその時になってようやく、相手の肩にケープのようなものがかかっていることに気付いた。ローブと同じ黒だ。店内が余り明るくないこともあって、今まで気付かなかったのだ。

「驚きました……光栄です。わたしもギルドには出入りしていますが、黒いケープの魔道師にお会いしたのは初めてです」



ケルクは恭しく頭を下げた。魔道師はかすかに笑った。

「どういうことなんだい？」

ラダが問いかけると、ケルクは青白い頬を珍しく紅潮させて答えた。

「魔道師には階級があります。勿論その知識と力の度合によるものですが……階級が上がってゆくごとにその証たるケープの色はどんどん濃くなり、遂には黒となるのですよ」

「じゃあ、この兄さんは一等上の魔道師なのかい？」

「ええ。超特級魔道師。五百年に一度出るか出ないかと言われる、幻の階級です」

へえ、と素直なラダが感心する。

「それならどうして黒のローブなんか着てるの？　黒のローブは邪悪なる黒魔道士どもの好んで身にまとう物よ」

まだ疑わしそうなフィリアの言葉に、魔道師は静かな口調で逆に問を発した。

「黒魔道がどういう魔道だか知っているか」

「何ですって？」

フィリアがサッと頬に血を上らせ、今にも怒鳴り出そうとする。魔道師はすっと右手を上げてそれを制した。

「まあ、座って食事をしながらでも話は出来る。どうやら神官殿は空腹の御様子、腹が減っては何とやらと巷間のことわざにもある」

丁度その時フィリアの胃袋が盛大に鳴った。僕らはつい吹き出し、フィリアは顔を真っ赤にして荒々しく椅子を引き、魔道師の正面に挑むように座った。僕らもそれぞれに椅子を選び、腰を下ろした。

「エールを三つと、果汁（ジュース）をひとつ。それと腹に入れるものを四人分。何でもいいよ。でも、ひとり分は肉は入れてもいいけど脂身はどけて少なめにしてくれ。あと、部屋は空いているかい？」

「そんなに一度に言わないでよ。覚えられないわよ」

僕たちが落ち着いたのを見て寄ってきた給仕娘は口を尖らせた。

「部屋は空いてるわ。銀貨四十枚の四人部屋でいいの？」

「頼むよ」

僕は娘に金貨を一枚手渡した。娘はちょっと顔をほころばせ、

「エール三つに果汁（ジュース）がひとつ、あと四人分の食事、ひとりは肉は脂なしで少なめね」

と去っていった。何よ、ちゃんと覚えてるんじゃない、とフィリアが呆れたように言った。ラダが豪快に笑う。ケルクも苦笑していた。

例の魔道師はタンブラーの中の蒸留酒を弄びながら、見ていないようで僕らを観察しているらしかった。半眼になった一重の目の奥で、漆黒の瞳が静かだが毅（つよ）い光を湛えている。外見は二十代半ばだが、超特級まで上り詰めるほどの魔道師だ。見かけ通りの年齢ではないだろう。

「さっきの問だけど」

早速フィリアが姿勢を正し、その魔道師を睨みつけた。

「黒魔道というのは闇や魔に魂を売り渡して得る暗黒の魔法。そんなことは子供でも知っていることよ」

「それは違いますよ」

横からケルクが遠慮がちに口を挟む。

「黒と呼ばれる魔道は、世間一般に負の効果をもたらすとされている術なんですよ。魔法それ自体には善悪はないのです」

「それはそうかもしれないけど、黒魔道士は邪悪な魔道使いじゃない！」

フィリアは柳眉を逆立てた。怒ると美人になるのだが、怒りを向けられた方はその美を楽しむことは出来ないだろう。

「でも、善（よよ）き黒魔道の使い手もいますよ。伝説の十一日を戦い抜いた四人の魔道士のひとりは黒魔道士でしたし、“運命の八人”のひとりも、魔道師のケープを身に着ける黒魔道の使い手でしたよ。確かその師に当たる人物も……そうでしょう、ディルスト？」

話を振られ、僕は慌てて頷いた。僕のレパートリーの中にはそういう、黒魔道の使い手を仲間にしている英雄たちの歌（サーガ）が確かにあったからだ。フィリアが僕を睨む。その唇が何か言ってやろうと開きかけた時、

「まあ確かに黒の魔道の使い手に善人は余りいないだろうな」

低く含み笑うような呟きが卓（テーブル）に流れた。魔道師であった。彼は少し悪戯っぽい笑みを浮かべていた。

「しかし魔法自体に善悪はないというそこの魔道士の言葉も正しいのさ。それは忘れないでもらいたいものだ。そして神官殿、黒魔道士の中にも善人とは言えないまでも邪悪ではない者も多いのだということを、心の隅でも構わないから、留めておいてくれないか。……世の中には、黒と呼ばれる魔道に生まれながらに秀でている奴もいる。だからって、そんな奴は生まれながらに邪悪か？」

フィリアはぐっと詰まった。光の神の教えに“生まれ落ちた時人は全て善き者である”という一条があることは、僕も知っている。

「う……生まれながらの才能でも学ばなければ……」

「その区別のつく前から親しみ秀でるから『生まれながらの才能』だとわかるわけだろう？　物心ついたら黒魔の術のエキスパートだった、というんじゃ、どうしようもない」

「だ、だったらその時から使わなければいいのよ！」

「そうだな」

魔道師はニヤリと笑って両手を挙げ、肩をすくめた。

「少なくともそう心がけてる黒魔道士なら邪悪と決めつけることもないわけだ。……神官殿を怒らせるつもりはなかったんだが、私自身れっきとした黒魔道の使い手だからな。悪い奴と決めつけられては、流石に余りいい気持ちはしない。決して善人ではないが邪悪ではないつもりだし」

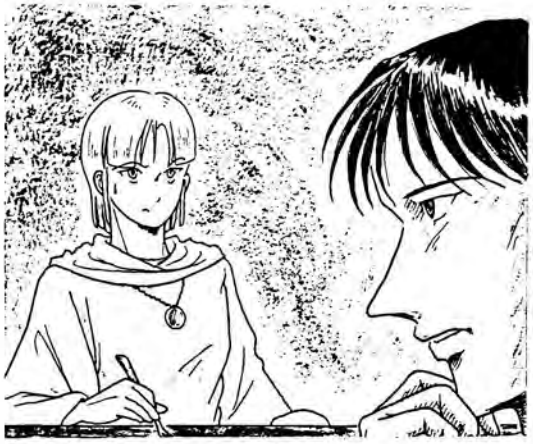
言って、魔道師はふと胸に手をやった。そこには、多分護符（アミュレット）だろう、奇妙な色合の宝石が嵌め込まれたペンダントが下がっている。それは、僕の見ている前で刻々と色を変えた。赤とも青とも、緑とも黄色とも紫とも……まるで虹の色全てをその中に封じているようだ。

そこへ飲み物と料理が到着した。フィリアも食欲を優先させることにしたらしい。ぱくぱくと口を遠慮なく大きく開け、肉の塊や野菜のぶつ切りを放り込み始める。勿論、自分の信じる神へ食前の祈りを捧げた後でだ。

「しかし変じゃないかい」

今度は巨漢ラダが料理を頬張りながら魔道師に話しかけた。

「黒魔道の使い手がどうして、そんな偉い



魔道師様としてギルドに認めてもらえたんだい？」

「……まあ、私はギルドの中ではちょっと変わった腫れ物的存在だから」

魔道師はタンブラーに口をつけ、トパーズ色の液体をほんの少し含んだ。

「厄介者が体（てい）よく祭り上げられたんだろうな。その証拠に、学院に来て教えろと言う声はかからない」

「でも、あなたも魔道学院で教えたいとは思ってないんですね」

僕が言うと、魔道師はパッと僕の方を見て、会心の笑みを閃かせた。

「流石は吟遊詩人だな。その通り。もし万が一声をかけられても、丁重にお断わりするよ」

僕は頷きつつも、どうして「流石は——」と褒められたのかよくわからなかった。と、そんな僕の訝りが顔に出たのだろう。魔道師は再び口を開き、

「いやなに、私の昔の仲間に吟遊詩人がいて、結構人を見るいい目を持っていたのさ」

と呟いた。

「随分昔だがね」

とも呟く。僕は純粋な興味に駆られ、彼に向かって「昔って、どのくらいですか」と尋ねた。

「……三百年くらいかな」

何気ない答に、僕はまじまじと相手の顔を眺めてしまった。仲間たちも仰天したように、

料理をつつく手を止めている。

「そんなに……では老師は延命と不老の術を会得していらっしゃるのですか？」

ケルクが興味津々の顔で問いかけると、魔道師は苦笑いしてかぶりを振った。つややかな黒髪がかすかに揺れた。

「どんな魔道使いでも、与えられた寿命を余り長く延ばすことは出来ないさ。人間の肉体には自ずと限界がある。延命も不老も、定められた限界を越えることは不可能だ。私の知っていたある魔道士は、強力な“転生”の術で二千二百年以上を同じ人格で生きていたけど、それだって肉体はせいぜい二百年までが限界だったというし、人格にしたって幾ら何でもそろそろ潮時かなと言って世を去ったしな。また別の魔道士は、肉体を捨てて護符（アミュレット）に魂を封じ込めることで三百年以上存在しているが、それはちょっと生きた人間とは言えないだろうな」

「では、どうして？」

「別段たいしたことじゃない。一種の呪いみたいなものかな」

魔道師は低く呟き、そして僕の方を見た。「しかしそんなことより、折角吟遊詩人さんがいるんだ。何か歌でも歌ってくれないか。隣の卓（テーブル）の客も、さっきから呼びたそうな顔をしてる」

言われて振り返ると、まださほど酔ってはいない感じの男たちが四人、丁度こちらを見やったところだった。目が合うとすかさず声をかけてくる。きっと僕が入ってきた時から呼ぼうと思っていたのだろう。僕は応じ、竪琴（リラ）を取り出した。

「何か珍しい英雄譚（サーガ）はないかい？　此処に来る吟遊詩人はみんなファルコーンやマナカルチャ、さもなきゃリナ王国復興の歌（サーガ）ばかりなんだよ」

どれもポピュラーでスタンダードな歌（サーガ）だ。僕だって駆け出しに近いから似たようなものでちょっと困ってしまったが、それでも知っている歌（サーガ）を挙げてみた。

「ええと……“四人の魔道士”は？」

「それはこの前聴いたなあ」

「では“運命の八人”はどうです？」

「そりゃ何人も歌ってったよ」

僕はガックリ来た。実を言うとこれが僕の一番得意な英雄譚（サーガ）だったのだ。

「うーん……あんまり“英雄譚”とは言えないんですけど、他には“誓言から逃げる魔道師”とか……」

「そいつは知らないな。初めて聞く題だ」

「それを頼むよ、吟遊詩人（リラ）さん」

僕はホッとして竪琴（リラ）を構えた。向かいでケルクが首をひねった。

「わたしも初めて聞きますね。第一、誓いを破った魔道使いは魔法の力を失う筈なんですよ」

「何でだ？」

「魔法とはまず言葉、その言葉を操る我々は殊に誓言を重んじるんです。誓いを破るということは言葉の使い手として失格であるということになり、その魔力を失うことにつながるのです」

そんなものかい、とラダが言うと、ケルクはしみじみと頷いた。

「わたしも、何人かそういった魔道士を見たことがありますからね。本当ですよ」

だが——この歌の主人公は違うのだ。僕は最初の和弦を鳴らすと、ゆっくりと歌い始めた。

昔　ひとりの魔道師がいた／災いを呼ぶ名を持ち　黒の魔道に秀でていた／その名は伝わらぬが／ある者たちはやがて彼を“誓言から逃げる魔道師”と呼ぶようになった

彼は若くして黒魔の術に長じたが／師の教えを守り　邪悪な道には決して踏み込まなかった／しかし皮肉にも彼は選ばれたのだ／闇の魔王子の憑坐（よりまし）として

彼は捕えられ　仲間たちの命と引き換えに誓いを立てさせられた／しかしまさに誓いが果たされようとした時／仲間たちが彼を救い　彼は自ら闇の魔王子を封印した／誓いを破り　魔道の力を失うことを覚悟で

だがしかし彼は力を失わなかった／彼は悟った　そして言った　「誓いは生きている」と／言葉通りそれからも魔の手は執拗に彼を追い／彼はその手を払いのけ逃れ続けた

僕はそれからその黒魔道師が如何にして逃げ続けたか、その戦いを延々と語った。しかしこの歌にはいわゆる大団円というものがないのだ。実は僕はそれが不満でこの歌を殆ど歌ったことがなかったのだが、他に歌うものがないのでは致し方ないだろう。

人は言う　「彼は呪われた魔道師だ」と／人は言う　「彼は宿命を負って生まれたのだ」と／だが彼は何も語らず／もしかすると今もなお　誓言から逃げているのかもしれない……

「その魔道師は潔くないわ」

更に何曲か歌って解放された後、早速というかやっぱりというか、フィリアが決めつけてくれた。

「そんな忌まわしい存在として生まれたとわかっていて、生きることにしがみつくなんて。私なら世界を危険に晒すより死を選び、神の御許へ行くわ」

「でも生き続けることを選ぶのも大変ですよ。いつ自分の肉体と魂を奪われるかという恐怖に克たなくては、生きてゆけませんよ。わたしなら到底耐え切れませんねえ。その恐怖に押し潰されるだけで死んでしまいますよ」

ケルクがのんびりと笑う。自称“憶病者”らしい台詞だ。

「だから世界の平和秩序と自分の命とを天秤にかけるなんていう神経が信じられないのよ」

「まあいいじゃないか」

ラダが五杯目のエールを呑み干しながらなだめた。彼は余り難しいことには関心がないのだ。

「良くないわ！　もしあたしがその魔道師に会ったら、光の神の御名に於いて、引導を渡してやりたいわ！」

どうもフィリアは酔っているらしい。少し目が据わっている。

僕は、例の黒ローブの魔道師に目をやった。最前からずっと口を開かず、胸の護符（アミュレット）に時折触れながら、何か思いに沈んでいるように見える。彼は僕の視線に気付いたか、ゆっくりひとつまばたきをして、僕に遠い目を向けた。

「あなたは——どう思います？」

ふと、僕は尋ねていた。何だか無性に、この魔道師の考えを聞きたくなったのだ。

「……君はどう思うんだ？」

何処か深い淵から響いてくるような声に、僕は何故か胴震いを覚えた。

「僕は……逃げるから追われるのではないかと思っています」

「逃げなければ追われない？」

「それは……わかりませんけど……」

「そうだな」

魔道師は頷いた。本当にゆっくりと、そしてかすかに。

「それは多分正しい。奴は、彼がことごとく逃れ、逆らうからこそ、尚更彼を手に入れようとするのだ。だが、そうだと言って逃げることをやめれば、奴に捕らわれるだけだ。逃げ続けるしかない……」

僕はじっと相手を見つめた。“彼”と口にした時の彼の声は、わずかにだが不自然な響きを孕んでいた。仲間たちは気付かなかったようだが、僕は曲がりなりにも吟遊詩人、人の声の表情を聞き取ることに関しては、何で

もない普通の人より長(た)けているつもりだ。

「だが彼は他人を自分の負っている業(ごう)に巻き込みたくないと思っている筈だ。あの歌が一体どうして出来たのかは知らないが、恐らくは彼がうっかり自分の業(ごう)を他人に知られ、そしてその度に相手を巻き込んでは迷惑をかけ、その積み重ねがそうしてひとつの歌にされた……のかもしれないな」

「まるで知ってるみたいな言い方だなあ。あんた、三百年以上生きてるんなら、その魔道師も知ってるんじゃないのか？」

ラダの無心な問に、魔道師は微苦笑した。

「ああ……否定はしないな……彼は……まんざら他人というわけじゃない……」

彼は切れ長の目を伏せた。そしてまた護符(アミュレット)に手をやった。

「……だが私としては他人でありたいな」

「そりゃそうだろう」

ラダは声をたてて笑った。

「あんたも巻き込まれたクチだろう？　そういう顔してるぜ」

「そう見えるか？」

魔道師は目を上げて口許を緩めた。

「だが、もう彼は決して他人を巻き込まないだろう」

「死んだのかい？」

「彼は他人を避け、他人から避けられるように努めているからな。だから、その歌もそれ以上長くはならないだろう。少なくとも彼はそう望んでいると思う」

「寂しい生き方ですねぇ」

ケルクがポツリと呟いた。確かにそうだと僕も思う。だが……

「そうまでして生きたいのかしらね」

フィリアが言ったが、彼女も少しは“彼”に同情し始めたらしい。声から棘が二本ほど減っていた。

「神官殿のように潔く死ぬ勇気がないからな」

魔道師は静かに目を閉ざし、しばし沈黙を守った。

「……だが彼も何度かは死に逃げることを考えたろうよ」

やがて目は閉ざしたまま、彼は囁くように呟いた。

「彼はこんなことを言っていた……自分はいっそ奴の支配を受け入れ、そして誰かがその自分を打ち倒しに来てくれるのを待とうかと……かなり本気で考えていたようだ」

「そんな冗談じゃないわ！」

フィリアが身震いする。

「それこそ他人を巻き込むことの最たるものよ！　あなたその魔道師と知り合いならそう言いなさいよ、自分は邪悪ではないとおっしゃる黒魔道師さん？」

また棘が一本増えた声に、魔道師はゆっくりと目を開いた。

「……肝に銘じておこう」

彼は小さく頷くと、卓(テーブル)に立てかけてあった杖(スタッフ)を手に取って立ち上がった。そして金貨を十枚ばかり、卓(テーブル)の上に放り出した。

「久し振りにいい歌声を聴かせてもらったよ。取っておいてくれ」

「ここんなに？」

僕はびっくりした。僕のようなまだ駆け出しに近い歌い手には、金貨十枚もの報酬は如何に言っても莫大に過ぎた。いや——たとえ僕が熟達した歌い手だったとしても、そうそう一度に金貨十枚もくれる客はいないだろう。

「いいんだ。本当に久し振りだったしな、わざわざ私と相席しようなどという物好きは」

魔道師は椅子を収めながら、照れたように目を伏せた。

「実を言うと、他人と話したのも久し振りだったんだ。だから——それは君たち四人へのほんの礼の気持ちさ。楽しかった」

彼は僕たちに軽く頭を下げ「良い旅を」と言った。そのまま立ち去ろうとするその黒マントの背中を、僕は思わず腰を浮かせ、呼び止めていた。

「ま、待ってください！」

魔道師は行きかけた足を止め、肩越しに振り返った。

「あの——あなたの、お名前は？」

漆黒の闇の色の瞳が、不思議なくらい真っすぐな光を湛えて僕を捕えた。その瞳は限りなく深く、静かで、穏やかだった。

「……知らない方が幸せだろう」

やがて微笑みながら、黒魔道師は言った。最初に僕らが見た、あの、ほんの少し寂しそ

うな笑みだった。

「……私の名は、災いを呼ぶから」

言い置いて、彼はくるりと身を翻した。そしてもはや僕らに引き留める隙も与えず、店の喧騒に紛れ、夜の中へと歩み去っていった。

「災いを……呼ぶ名……」

僕は呟いた。

忘れている筈もなかった。たった今、僕はその言葉を使った歌を歌ったばかりだったのだから。

仲間たちも茫然と戸口を見送っている。

僕は今すぐ立ち上がりこの店を飛び出したい激しい衝動に駆られた。仲間たちも同じであることを、何故か僕は確信していた。だが、誰もそうしなかった。僕もそうしなかった。僕には、そして多分仲間たちにも、わかっていたのだ。飛び出して追ってみても、もう決して彼を見出すことは出来ないのだと。

二度と会えないのだと。

だけど僕は、そしてラダも、フィリアも、ケルクも、決してあの黒魔道師のことを忘れないだろう。いや、忘れられないだろう。

「ディル……ディルスト」

フィリアがまだ店の戸口の方を見つめながら、ポツリと僕を呼んだ。

「今晩、もう一度あの歌を聴かせて……部屋に上がってから、あたし達だけに」

僕は頷いた。

そして、決めた。

あの歌の歌詞を変えよう。

最後の一節を、ほんの少しだけ。

だが彼は何も語らず／闇色の瞳に光を
宿し　今も誓言から逃げ続ける……

そう、僕たちが選んだ“瑠璃の泉”亭に、その魔道師はいたのだ……

＝山本みつね より Last Message＝

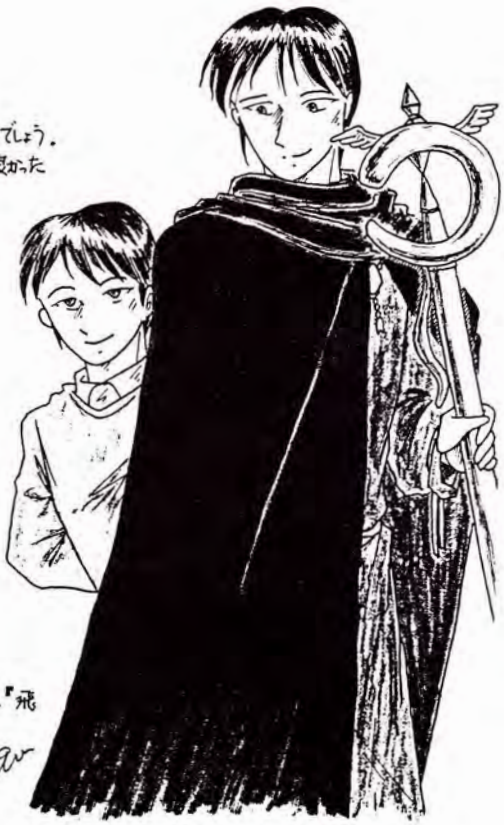
どうも37号以来お邪魔しました。

『飛翔』の歴史上、厚かましくも小説なんぞ載せた奴は私が初めて……でしょう。しかも39号以降は延々『魔道使い』モノ。よーやる(笑)。他のネタでも良かったのですが、丁度原稿を書こうかという頃になると創作の里に某黒魔道師くん——ちなみに39号の主人公と今回の謎の(何処かだ)黒魔道師とは、実は同一人物だったりする……かもしんないぞ——やヴィラバドラ君がやってきて「私のことを書くんだっ！」と訴えて回るものですから、ついつい筆がそちらの方へ……。

さて、最後ですからこれまでの作品の種明かし(?)なぞしておきましょう。37号「梁父吟 習作」及び38号「前夜 習作」この二作品は『三国志』の諸葛孔明とその妻黄氏の出会いと別れをみつねなりに創作したものです。続く39号「道の途中」は、とあるパソコンゲーム(とあるRPGコンストラクションツールに入っていたサンプルゲーム)で私がそっこん惚れこんだキャラクターを使って、当のゲームの直前の話を作ってみたという代物……だから主人公の名前が出せなかったのです。『MSXマガジン』編集部の皆様、改めてごめんなさいね。40号「四番目の魔道士」と41号「十一日目」は、その同じゲーム中にちらっと出てくる伝説を、これまたちゃっかりと私なりの話に仕立てあげた作品でした。ですから個有名詞や展開の殆どはみつねのオリジナルです。あの四人の名前は、インド神話から採ってきたのよ。お暇な方は調べてみてね。

さあとにかく私もこれで卒業です。最後になりましたが、慌ただしくお付き合いくださった『飛翔』編集委員の方々、そして読者の皆様——あなたに、感謝してます♡

それでは皆様、どうぞお元気で。　1992年 2月 吉日　mitsune



卒業時の就職企業名等

コース 卒業者数	地域文化 45 (29)	社会科学 33 (10)	外国語 22 (15)	数理情報科学 22 (3)	物理生命科学 15 (0)	自然環境研究 12 (7)	生体行動科学 29 (15)
卒業年度	H立情報ネットワーク	コスモ・エイティ	テレコム・ジャパン	中国日本電気ソフトウェア③	KTIセミコンダクター	H新機械	新H鉄情報通信システム
	中国電気ソフトウェア	池田銀行	テレシス	三洋電機	富士通番川デジタル・テクノロジ	一条工務店	広島YMCA
	広島総合銀行②	中電技術コンサルタント	広島総合銀行②	タダノ	松下電気産業	アジア航測	ダイナウェイ
	住友電気工業	NTT	中国新聞社	富士通番川システムエンジニアリング	クリナップ	H本電装	飛鳥建設
	大H本印刷	中国放送	エアーニッポン	リョービ	H本たばこ産業	復建調査設計	旭観光
	ユニード	H本通運	マツダ②	四国日本電気ソフトウェア	林兼産業	松下電気情報システム広島研究所	協和発酵
	阪急交通社	伊藤忠商事	東急観光	松下電器産業②			西H本旅客鉄道
	福岡銀行	そごう	中国放送	富士通テン			福武書店
	白帝社	キャノン	富士通SSL②	クレオ			リクルートコンピュータプリント
	紀伊国屋書店	広島銀行②	広島テレビ放送	大林組			住友生命
平成3年度	H本コンピュータシステム	岡山リゾート開発	H本交通公社	住友銀行			森永乳業
	辻オルガン	三菱マテリアル	フォード自動車				H立製作所
(4, 3)	ケンウッド	NHK	大H本印刷				H産自動車
	広越グループ	アルパック	H本製鋼所				H本IBM②
	H本情報管理システム	NTT中国	日立ソフトウェアエンジニアリング				電通
	前田建設	毎日コミュニケーションズ					H本メディスルサプライ
	大和冷機工業	富士通					セントラル・コンピュータ・サービス
	鋼管計測	中央出版					
	スズキ						
	NHK						
	H立製作所情報事業本部						
	リクルートコンピュータプリント						
	松下電器産業						
	写研						
	モスフードサービス						
	OG情報総研						
	公務員 2	公務員 5	公務員	公務員	公務員	公務員	公務員 2
	国家 2	国家 1	国家	国家	国家	国家	国家
	地方	地方 4	地方	地方	地方	地方	地方 2
	教員 3	教員	教員 1	教員	教員	教員	教員
	進学 1	進学 2	進学	進学 8	進学 7	進学 5	進学 7
	未定 8	未定 0	未定 3	未定 0	未定 0	未定 0	未定 0
	(不詳)	(不詳)	(不詳)	(不詳)	(不詳)	(不詳)	(不詳)

卒業者　178（75）　（ ）内数で女子　②は2名の就職

特別研究論文題目紹介.

1　卒業論文

コース（指導教官）	氏名	論文題目名
地域文化		
（米田）	岡本　一幸	ビートルズと60年代英国の若者文化
（頼）	神原　紳滋	日本人の朝鮮観に関する考察
（志邨）	杉本　栄作	ジャズ・ミュージックの発生基盤に関する研究
（福嶋）	安田　隆彦	『アドルフ・ヒトラーの精神形成時代と根本思想について』
（志邨）	赤尾　俊介	ニクソン政権のヴェトナム外交政策
（中山）	石田　陽子	近世日本農村の休日
（朝倉）	上芝　令子	良寛の人と作品　－「良寛禅師奇話」の再検討－
（小林）	内山　清美	東亜同文書院の研究－戦前日本の“対支文化事業”の一断面－
（村上）	江崎　和弘	広島におけるパチンコ店の立地
（嶋）	大中　祐二	沖縄の親族に関する一考察（系譜の可塑性・門中と祖先祭祀上の禁忌との関連性）
（鹿野）	岡本由紀子	アメリカにおける自動車貨物輸送
（佐藤）	鍵矢　智子	アンデスにおける社会的空間的配列とその儀礼～ＭａｃｈｉとＬａｙｍｉの事例に基づいて～
（水島（裕））	神成　順子	内田百聞論
（高谷）	岸本　詩子	病と社会－治療儀礼の一側面について
（高谷）	城戸　康代	語りと伝承－昔話研究の間から－
（嶋）	河内あゆみ	「女性婚に関する一考察」
（戸田）	河野　学	『異邦人』－太陽とムルソ－
（福嶋）	後明　孝子	ミヒャエル・エンデの世界
（青木）	定行　美佳	『三国志』に見る　中国と日本との感覚的差異に関する一考察
（圀府寺）	重藤　嘉代	エル・グレコ研究　－神秘主義思想との関わり－ドーニャ・マリア・アラゴン学院の祭壇画の図像解釈による考察
（志邨）	末次千加子	オナイダ・コミュニティに関する考察
（米田）	関野由美子	Ｔ．Ｅ．ロレンスの現像－アラブとイギリスのはざまで－
（水島（裕））	世戸原紀子	ペローの昔話研究……ペローの女性観……
（米田）	武村美奈子	イギリス中世にあける城とその城郭都市
（志邨）	伊達　智子	アメリカ大統領の戦争権限と戦争権限法
（圀府寺）	長崎　さき	「ヨゼフ・ボイス研究」
（友田）	夏野　健一	イギリスの産業革命と社会問題
（高谷）	野村　幸代	タイ性産業の構図

(岡本)	原田　由香	労働進出と女性解放
(青木)	播野　尚子	舞踊について－ランガーの芸術論を参考に－
(鹿野)	広兼　恭子	合衆国における航空輸送産業　～規制緩和を中心として～
(志邨)	福井　光広	マーカス・ガーヴェイの運動について
(鹿野)	藤谷　春恵	戦後のアメリカ社会における広告
(頼)	堀江　　潔	日本古代の皇太子制成立に関する一考察－嫡系皇位継承理念と藤原不比等－
(小林)	丸田　敏晴	広島県満州開拓団に関する一考察－旧満州浜江省五常県南陽川芭連村開拓団を事例として－
(友田)	三輪　　覚	「英国鉄道の誕生と発達」
(朝倉)	森田奈穂子	句集「枕の塵」の研究－瀬戸内御手洗における俳諧の考察－
(藤井)	山崎　朋子	月と芋と餅－行事食から見たアジアの八月十五夜行事－
(嶋)	山田　吉鐘	猪飼野形成史
(田原)	吉永　里香	『シャーロック・ホームズ』とヴィクトリア朝時代－モラリティの観点から－
(佐藤)	吉本　麻美	地域・人・やきもの　宮島焼の性質と方向を探る
(村上)	渡辺　美幸	再開発による住民間のつきあいの変化－段原再開地区を例として－
(村上)	ツツミ・ガブリエラ	日本の女性の生き方
社会科学		
(材木)	青北　千鶴	逸脱行動の社会学的分析－デュルケーム理論の展開とレイベリング論との関係について－
(鯵坂)	池田　洋一	『中国山地の過疎の実態と過疎脱却の試みに対する－考察－《過疎を逆手にとる会》を事例として－』
(水島（朝))	泉　　公裕	岩国基地における基地障害とその対策に関する一考察
(高崎)	大室　孝弘	物価指数の理論と実際
(舟場)	岡村　雅道	広島都市圏構造分析－多心型構造実現への可能性－
(秋葉)	笠間　英紀	「地域振興策とリゾート問題」
(中逵)	金澤　匡晃	在韓被爆者の現状－日韓の行政と支援団体の責任と役割－
(中峯)	木林　英幸	「時計と時計の時間の歴史」
(伊藤)	久賀谷千春	景観保護法・行政の現状とその問題点
(伊藤)	倉田　幸生	「第二帝政期ドイツにおけるユダヤ人の動向に関する一考察」
(舟場)	神田　優子	テクノポリス型地域開発の現状と課題－山陽地区を例に－
(材木)	小林圭一郎	「スポーツ集団の特質とリーダーシップ」

(中逵)	社本　朗	デタント構築者としてのキッシンジャーとゴルバチョフ
(伊藤)	杉山　浩二	「わが国における森林法制度の現状と問題点－森林の保全と利用の両立をめざして－」
(松岡)	高橋　悦子	都市再開発事業に関する社会経済的研究
(水島（朝))	高橋小都江	死刑信仰　正義に基づく不正　死刑制度が“死刑”になるまで
(松岡)	竹内　憲司	環境価値の社会経済的研究
(森)	中西　完二	「ソ連邦の形成と民族問題－ザカフカス地方の事例－」
(舟場)	中家　伸之	安定成長期における繊維・アパレル産業の変貌－ポストフォーディズムの可能性の検証－
(鰺坂)	西島　芳	「景観形成とボランタリー・アソシエイション－英国ローカル・アメニティ・ソサエティとシビック・トラストを事例として」
(中峯)	馬場　淳	ネップとペレストロイカとの比較研究
(伊藤)	東　倫江	「ゴルフ場建設に関わる法的規制の現状と問題点」
(松岡)	古木　二郎	都市水利用に関する社会経済的研究
(中峯)	細谷　昌弘	大戦間期における技術革新の研究
(水島（朝))	保手浜茂樹	米兵犯罪と地位協定第17条の解釈・運用をめぐる問題
(中逵)	松野下茂生	米ソ衰退の比較
(材木)	持原万里子	「高齢化社会のなかの福祉と社会保障」
(中逵)	山根　早苗	在韓被爆者の歴史と広島市～忘れられたもうひとつのヒロシマ～
外国語		
(嶋屋)	井原　美奈	Komparative Analyse des Originals “Nametokoyama no Kuma” von Kenji Miyazawa und des ubersetzten Texts “Die Baren vom Nametoko”（宮沢賢治「なめと山の熊」とその翻訳　Die Beras vom Nametoko”との比較分析）
(上原)	中塚　千也	“Japanese Communication Chracteristics in Intercultural Settings” 「異文化間の場における日本人のコミュニケーションの特徴」
(内藤)	原口　紀子	ヌーヴェルヴァーグ映画作家／F．トリュフォー：<大人は判ってくれない>の中のトリュフォー的映画愛に関する一考察
(今里)	磯部　佳子	Sexism in English :Movement towards Non－Sexist Words　「英語における性差別－非差別的言語への動き－」
(山本)	井上　純子	A Study of F.S.Fitzgerald's The Great Gatsby:American Dream and the Double Vision　（フィツツジェラルドの『偉大なるギャッビー』の研究：アメリカの夢と二重の視点）

(安仁屋)	加藤　純悟	An Analysis of English Polite Expressions in Conversation －会話における英語丁寧表現の分析と考察－
(キャロル・リナート)	国近　尚美	A Sociolinguistic Analysis of Compliments in American English Conversation　アメリカ英会話におけるほめことばの社会言語学的分析
(キャロル・リナート)	黒田千佳子	Backchanneling and Simultaneous Talk:Comparison of Japanese and American English　相槌と同時発話：日本語とアメリカ英語の比較
(小林)	土肥　一歩	A Study of the Relationship between Listening and Reading Comprehension:Correlation and Transfer　「聴く能力」と「読む能力」の関係についての一考察－相関と転移を中心として－
(安部)	林　晶子	Pre－departure training for Japanese employees going abroad on business (日本人海外派遣員の派遣前教育の研究)
(岩倉)	福島　卓也	Small Clauses A:Contrastive Analysis of English and French　小節：英仏対照分析
(上原)	福本　玲美	An Exploratory of American English Polite Expressions:Requests and Suggestions　依頼・提案にみるアメリカ人の丁寧表現研究
ゴーズベリ，ピーター	藤田　浩範	The Possibility of Communication　(コミュニケーションの可能性)
ゴーズベリ，ピーター	堀川　恵子	Comparative studies between single foreign students and those who are accompanied by a family,on difficulties in adjusting to living in Japan　日本生活への適応問題における単身留学生と家族滞在留学生の比較研究
(山田)	松村　智紀	The Acquisition of Articulatory Features of English in japanese Students　(日本人学生における英語の調音的特徴の獲得)
(内藤)	丸尾　裕子	フランス児童文学の研究
(谷本)	三原　明子	A Contrastive Study of the Meaning of Silence in the Japanese Culture and the American Culture　日米における沈黙の意味の比較対照研究
(佐野)	三宅　宏明	A STUDY OF SORTING KEYS IN MULTIPLE WH WORD QUESTIONS　多重WH疑問文におけるソーティングキーの研究
(伊藤)	宮本　玲子	FEMINIST UTOPIA IN THE LEFT HAND OF DARKNESS BY URSULA K.LE GUIN　「『闇の左手』におけるフェミニスト・ユートピアの可能性」
(安部)	村上ゆかり	Jewish－Americans in the Ethnic Jokes.　(エスニック・ジョー クに見られるユダヤ系アメリカ人)
(稲田)	若山　三春	Humour in James Thurber　(ジェイムス・サーバーのユーモア)

数理情報		
(中原)	足立　朋哉	型つき関数型言語による定理証明支援システムの作成
(原田)	荒井　哲也	グラフィック3次元カーソルの実現に関する研究
(水上)	石田　和久	同期発電機の励磁システムにおける適応制御に関する研究
(栞田)	梶本　和敏	ブロック計画の研究
(中原)	駒瀬　守保	Ｍｉｎｉｍａｘ定理の構成的証明について
(山縣)	坂口　昌志	幾何拘束に基づく形状モデル操作に関する研究
(西井)	高井由美子	リモートセンシングデータの判別方法の比較
(原田)	田中　靖之	曲面を考慮したソリッドモデルにおける物体間の干渉の検出
(山縣)	谷本　孝文	ソリッドモデルの状態変化によるプラン生成問題の解放－シミュレーションによるマニピュレータの自動経路生成－
(西井)	遠富　理江	ランドサットデータの判別分析とその視覚化
(阿賀岡)	内藤　正史	ユークリッド空間の超曲面論
(久保)	中田　寿夫	複素力学系
(水上)	日浦　章博	ニューラルネットワークを用いた動的システムの制御に関する研究
(水上)	平田　達也	ファジィ制御とニューラルネットワークに関する研究
(阿賀岡)	古橋恵美子	ガウス．コダッチの方程式とその応用
(吉田（敏))	松村　和征	ホモロジー群とその応用
(栞田)	三井　章	要因計画の研究
(水上)	向谷　博明	特異摂動システムにおける微分ゲームの数値的解法に関する研究
(磯道)	森本　健	３人ゲームにおけるジレンマ状況を生きぬく戦略の研究
(伊藤)	山口　亨	順序集合と数え上げ組合せ論
(磯道)	山本　泰文	無限繰り返し製品品質ゲームの最適政策
(磯道)	若山　竜太	自然言語解析の研究
環境科学		
(檜原)	蔵下　寛	セリウムプクニタイドの核磁気共鳴
物質生命		
(播磨)	池田　明隆	ＴＯＦ法による有機分子固体膜の移動度の測定
(赤堀)	橋本　親	光合成　光科学系II（ＰＳII）の低分子量蛋白質について
(田村)	樋口　憲二	液体カルコゲナイド半導体の光学的性質
(宇田川)	神田　利和	層流・乱流遷移の光子相関 velocimetry による研究

(藤井)	多々見貢朗	侵入型希土類化合物$R_2Fe_{17}N_3+\delta$（R＝Sm，Ce）の作製とその磁性
(高畠)	田端　主	Mgを用いた水素吸蔵合金複合材料の特性
(好村)	永井　道宏	規則合金の秩序形成過程
(大林)	花高　信哉	数ゆらぎ光子相関速度計の開発
(田村)	藤田　邦男	低密度液体ガリウムの構造
(岡野)	森脇　潤司	温州みかん未熟果中の極性成分
(武田)	横井　英司	サーファクタント系の構造相転移における研究
(山下)	横井　信生	炭酸ガスの電気化学及び光電気化学的固定
(内山)	吉棟　尚美	HL－60細胞のTPA早期応答遺伝子産物による転写制御
環境科学		
(堀越)	板橋　志保	太田川水系感潮域低泥中の生菌数の測定
(中越)	常盤　朝一	「種子島のマングローブ林の固体群構造と生育条件」
自然環境		
(根平)	安部　哲人	「芸北地方の湿原に関する生態学的研究」
(堀（信))	岡本　透	溶食による地形特性とその形成環境
(高橋)	越智　裕之	マツノマダラカミキリ幼虫のアカマツ丸太における空間分布に及ぼす密度効果
(福岡)	岸　泰之	都市内外の環境変化に関する年輪気候学的研究
(堀（信))	高山　陶子	地震性地殻変動による南四国の海岸地形変化
(堀越)	外山　哲	クロロホルム燻蒸抽出法による土壌中の微生物バイオマス測定の試み
(日下部)	中越　有希	食虫類における遺伝子クローニングの試み
(佐田)	西村　一彰	広島県湯来地域における中・古生界の地質構造
(福岡)	萩原　良俊	都市気温分布の立体構造に関する気候学的研究
(林（七))	原野真由美	植物中のアレロケミカルズの化学的研究～シロモジを中心として～
生体行動		
(黒川)	盛川　浩次	自己解釈概念の対人関係の質に及ぼす効果
(上里)	阿部　晶子	自己開示とソーシャルサポートとの関連について
(上里)	池田　真紀	生理的変化の知覚が情動に及ぼす影響
(堀（忠))	石井　博子	喫煙行動のVDT作業に及ぼす影響の検討
(林（春))	上崎　洋子	送り手の身体的魅力と専門性が態度変容に及ぼす効果についての研究
(西村)	上田　雄士	男女の性役割観と自己の二面性の関連についての研究
(渡邉)	生地ふみ子	ニワトリ胚細胞が分泌するオートクライン増殖因子はマウス3T3細胞に対して増殖促進活性をもつか
(安藤)	大村　栄子	海水ウナギの腸におけるカテコールアミン受容体

(西村)	甲斐ゆかり	女子大学生のダイエット行動とスチューデントアパシーとの関係について
(生和)	金田　聡	認知要求と mood が意志決定に及ぼす影響についての研究
(菊地)	古賀　千明	ラット単一速筋線維におけるミオシン軽鎖の分布
(生和)	小松　千尋	登校拒否に関する一研究－ケース報告における症児の情動及び行動の予測について－
(林（春))	丹下　和美	「地球環境問題に関する意識構造の分析」
(上領)	中川　清美	酵母ペルオキシソームの膜タンパク質の精製とその特異抗体の作製
(安藤)	長島　圭	海水ウナギ食道における脱塩機構
(渡邉)	林部　慈	ニワトリ胚胸骨膜繊維芽細胞のオートクライン増殖とその増殖調節因子
(堀（忠))	久村　嘉代	連続作業中の眠気と脳波活動との対応
(堀（忠))	日比野憲司	入眠期における心理的体験の精神生理学的検討
(天野)	廣田　勝弘	アフリカツメガエル変態課程にかける遺伝子発現プログラムの再構成についての研究
(荒井)	福永　徹	テニスクラブの集団構成と参加行動に関する調査研究
(小林)	藤田　佳織	アフリカマイマイ口球神経節から単離した生理活性物質
(西村)	藤原　敬子	自己評価に影響を与える要因について
(黒川)	船木　展子	Gender Salience 発生機序に関する実験的研究
(生和)	細羽　竜也	ＵＣＳ強度評価が不安条件づけに及ぼす効果
(重中)	牧野　壱彦	単核性太陽虫R. elegans の連絡橋と軸足に関する微細構造の研究
(菊地)	村木　里志	有酸素運動が精神状態に及ぼす影響に関する基礎的研究
(林（春))	山崎　尚美	群衆の固体数認知の実験的検討
(林（春))	山根　雅彦	社会的ジレンマ状況における情報の役割に関する実験的検討

編　集　後　記

～今年一年おつかれさま～

一年間の飛翔委員は、自分自身で物事を考えるという意味でたいへん有意義であった。同時に自分の文章表現力がいかに稚拙であるか痛感した。どうやら、私の書く文章は難解であると一部で評判らしい。つくづく物書きというという職業（仕事）は才能がいる事、又、批判する事は誰にでも出来る事が理解できてよかった。最後に新参者を快く受け入れてくれた編集委員の人々に心から感謝する。

あまり言いたくはないが引退にあたって言わせてもらう。今後、広報委員になられる教官方へ。学生が助言を求めにくるまで怠惰に待つ事なく自ら積極的に編集、執筆活動に参加して頂きたい。学生の文章を検閲するだけという態度は止めてもらいたい。せめて我々の足を引っ張る事なく、なおかつ我々と共に編集後記を書ける位の働きはしてもらいたいものである。　　（01生　大村　尚）

◆

去年の40号の編集後記に「〆切破りの常習犯」と書いて、まさに今回その通りになってしまった。「楽勝さっ、フッ」と甘く見ていたことが敗因でした。資料を読めば読むほど泥沼化していったのであります。ああ、今回も私は〆切破りーチャンチャン♪

ペナルティー（penalty）－①刑罰。②罰金。③反則に対する罰。④報い、天罰。－この言葉に縁深い毎日。ちなみに今、後期試験の最中で、超ナイスな問題をだされる先生もいらっしゃって、やっぱり大学はスゴイのだとしみじみ思ってしまうのでありました。……編集委員の皆様に深くお詫び致します。

（02生　南場　千里）

今回、小説らしきものを載せていただきましたが、自分の書いたものが活字になるということは、うれしさ半分こわさ半分といった感じです。

でも、そういうスリルを味わえるところが文章を書く楽しみなのかもしれません。

次回も何か書きたいなあと考えております。

（03生　中島　英紀）

◆

私は飛行機に乗ったことがない。帰省する時も新幹線の方が高くつくが飛行機に乗らないできた。別に飛行機が嫌いだからではない。その理由を聞かれれば「落ちるから。」と言ってきた。どうやら今年はそうも言ってられないようだ。千田はあと１年でさらば、私の編集委員生活もあと１年である。

（02生　内田　知宏）

◆

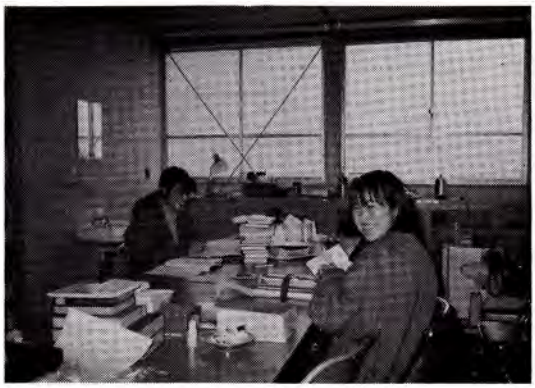
同じ編集委員の某Ｕ氏は“仏”（外国語特別演習のこと）をとったそうですが、私は“独”をとりました。それが編集委員会のある水曜４コマに入っていたので、今年はほとんど仕事ができませんでした。来年度には不死鳥の如く華麗に復活させていただきますので、よろしくお願いいたします。

（02生　森野　美和）

冬にはでっかいお鍋を用意して、野菜や肉をザクザク切ってボコボコ入れて、ゆっくりゆっくりかきまぜながら、いいにおいのホワッとするシチューを作ってみたいと思いませんか？

私は一般教育はそんなふうにやっていきたいと思っています。自分の中にいろんなものをボコボコほうり込んで、ゆっくりゆっくりかきまぜながらグツグツいわせていたいなーと思います。何が入っているんだかわからないけれど何だかおいしそうな、いいにおいのする人になりたい。

(03生　古田　智子)



こんな感じでやってま～す。

◆

初めて取材らしいことをしましたが、随分と手落ちがあったりして思ったより難しいことに驚きました。他の委員さんに相変わらず迷惑をかけたけれど、前回よりは少し貢献したような気がするので、ちょっぴり満足感があります。けれど仕事量はほんとに小さいので、こんな私を忘れずにいつも事をかけて下さった方々に感謝するばかりです。申し訳なかったのと同時に、皆さん本当にお疲れ様でした。

(02　蟹由　昌美)

はー、やっと終わったかー。というのがまず第一声。そんなに仕事したのかっていわれたら中途半端なトコいっぱいあったし、皆にもいっぱい迷惑かけたけど。

でも「飛翔」やってからいろんな事を真剣に考えた。毎日のほほんと過ごしてて気付かなかった事に少しは目が向くようになってきた…ような気がする。

あー、もう面倒くさい、やめたいっ!!と何度も思ったけど終わってみるとやっぱり、やってよかったと素直に思える所が私の長所なのかもしれない（？？？）。

とにもかくにもこれで私の編集委員生活は終わった訳だ。後輩の皆、後は任せたっ!!

「飛翔」がこれからも学生に様々なきっかけを与えるとともに、皆が自由で活発に意見を述べれる場でありますように…。

(01生　岡村　美穂)

平成４年度総合科学部学期区分の臨時変更について

本学部は平成４年度末に東広島市へ移転する予定です。これに伴い平成４年度（専門教育・一般教育）の学期区分を下記のとおり臨時に変更いたします。

記

期間		区分
前期	４月１日～４月８日	春季休業
	４月９日～７月17日	授業
	７月18日～８月31日	夏季休業
	９月１日～９月17日	授業
	９月18日～９月30日	秋季休業
後期	10月１日～12月26日	授業
	12月27日～１月７日	冬季休業
	１月８日～２月３日	授業
	２月４日～３月31日	学年末休業

広報委員

堀越孝雄　古東哲明　松岡俊二
上原麻子　小野光代　水上孝一
播磨　裕　佐藤博明　上領達之

事務官

木上尊子　伊藤弘之

学生編集委員

岡村美穂　内田知宏　南場千里
森野美和　蟹由昌美　中島英紀
古田智子　古川博子　大村　尚

広島大学総合科学部広報委員会
住所：広島市中区東千田町１－１－89
電話(082)241-1221　内線2247